

WATARU KOYAMA



Selection Works

2025



CV

小山 涉

1992 東京都生まれ

2016 東京造形大学 造形学部 美術学科 絵画専攻卒業

アーティストインレジデンス

2020 京都:Re-Search 2020 in 南丹（京都府南丹市、京都）

個展

2023 Snap out of it 正気を取り戻せ（Art Center Ongoing、東京）

2021 心臓が動いている（デカメロン、東京）

2019 Untouchable（北千住 BUoY、東京）

グループ展

2025 Life Rehearsals（中間美術館、北京、中国）

2023 facetoface.controlnet [SITUASIAN vol.2]（LANLANLI & ONEPIECE GALLERY、廈門、中国）

2023 造形思考1-現在の手ざわり-（東京造形大学附属美術館、東京）

2023 姫本たけし現代アートコレクション vol.4 ヒメコレ SUMMER in 須崎 Everything Everywhere All Alive（旧三浦邸ほか、高知）

2023 三菱商事アート・ゲート・プログラム 2021-2022 支援アーティスト6組による新作展（代官山ヒルサイドフォーラム、東京）

2022 弘明寺オープンスタジオ 2022 秋（Meiro Koizumi Studio、神奈川）

2022 WVlog:personal（Art Center Ongoing、東京）

2022 すみっこ CRASH ☆（無人島プロダクション、東京）

2021 ALTERNATIVE KYOTO —もうひとつの京都— 想像力という〈資本〉 / 南譚 介在する因子（南丹市八木町各所、京都）

2020 1GB（スパイラルホール ホワイエ、東京）

2018 Escape（Art Center Ongoing、東京）

2016 SUPER OPEN STUDIO 2016（相原スタジオ、東京）

2015 Studio Exhibition 2015 summer（大野智史スタジオ、山梨）

上映

2025 A Rehearsal: Dialogues on Trauma and Alternative Learning（中間美術館、北京、中国）

2025 第7回バンコク実験映画祭（One Bangkok Forum、バンコク、タイ）

2019 RAM PRACTICE - ポストドキュメンタリーをめぐって（渋谷ユーロライブ、東京）

パフォーマンス

2019 サーカス、フェス [SakSak]（blan Class、神奈川）

2019 Phantasma / みえてくるもの [SakSak #14]（blan Class、神奈川）

2018 旅する地域考 —秋田で着想する夏編（五城目町、秋田）

2018 スペクタクルの林間学校 [シアターコモンズ・ラボ]（SHIBAURA HOUSE、東京）

展示企画

2023 EDITION BOX II -body of concept-（藝大アートプラザ、東京）

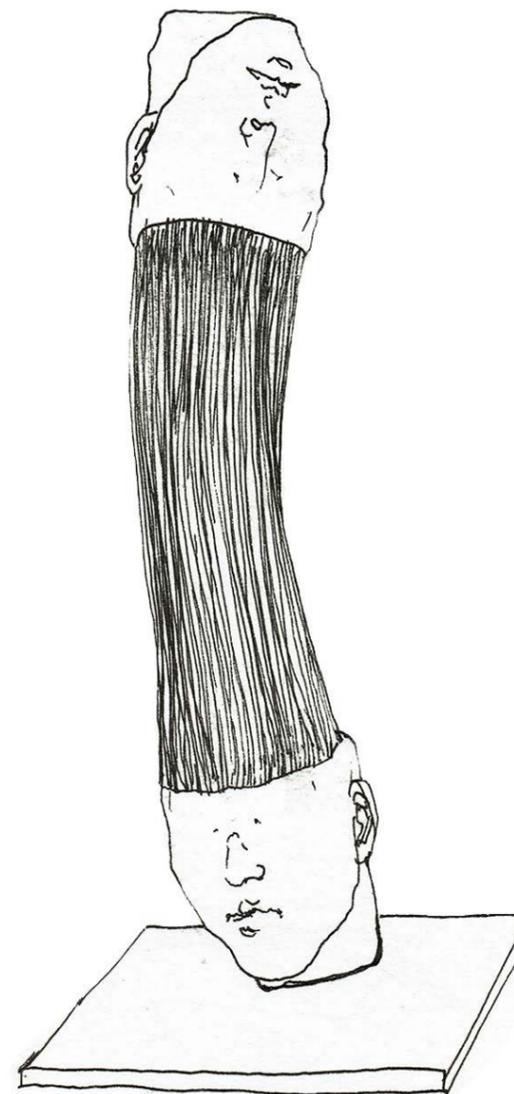
2020 EDITION BOX -VIDEO WORKS as MATERIAL-（FIGURE 17-15 cas、東京）

2019 作品を「飾る」#2 -VIDEO EDITION BOX-（Art Center Ongoing、東京）

2018 作品を「飾る」#1 [SUPER OPEN STUDIO 2018]（相原スタジオ、東京）

採択

2021 三菱商事アート・ゲート・プログラム 2021-2022 / 部門：ブレイクスルー



Artist Statement:

私は主に映像表現を通じて、人間の精神を探究しています。テーマは感情、死生観、自明性 / 常識、精神病理などであり、社会と個人のあいだで揺れ動く領域に焦点を当てています。近年は、作家と被写体との親密な関係性の中から生まれる表現に関心を持っています。

私の制作の基盤には、引きこもりだった思春期の経験と、精神保健福祉施設でスタッフとして働いた経験が深く影響しています。これらの経験は、人間の内面世界に対する観察や想像、他者との対話の過程、社会的規範の相対化、そして答えが出ない問いに対して分からないなりに想像を巡らせることを、私の中で育んできました。

人は、悲しみを抱えながら笑うこともあれば、喜びから泣くこともあります。大きな声は単純化を強いられることがあります。小さな声は複雑さやニュアンスを保つことができます。私の映像作品は、私的な人々の声に耳を傾け、その最も内奥にある物語に、結論を求めることなく想像を巡らせることを鑑賞者に促します。

人間の精神を探究する中で、私が芸術表現に求めるものは、私たちの人間性を規定する数多くの境界線を揺さぶる力です。



CRPPP - 包括的抑圧防止プログラム -

2023, video installation, 33 min 06 sec

Link to the video: https://youtu.be/1Ygl_iyt0v8



ある精神疾患の当事者でありながら精神科医療従事者でもある女性と協力し、彼女の内に抱える” やってみたいこと” を話し合いながら、それらを実際に形にしていく過程を納めた映像作品。

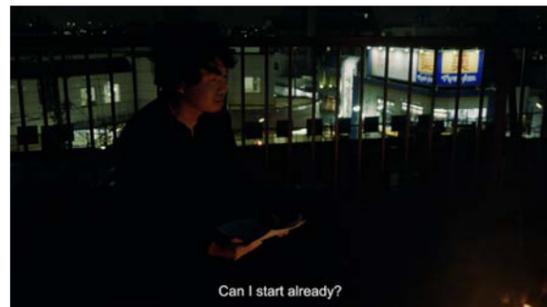
彼女は作家の私に対して「アーティストは社会の箱庭の中で遊ぶのが上手」、「でも私は箱庭を壊したいんです」と言う。私は彼女の”箱庭”から受ける抑圧を全て取り除くことはできないが、彼女の箱庭を上から一緒に俯瞰し、箱庭を壊さずに一緒に遊ぶ方法を探ることにした。

タイトルの”CRPPP”は、主に精神科医療現場において用いられるプログラム”CVPPP”（シーブイトリプルピー）を振ったもの。患者の症状から起こる暴力や攻撃性に対して適切に介入し、患者の尊厳を守り、安全を確保した上で患者と医療従事者の両者を守るプログラムとして考案された。”CVPPP”（包括的暴力防止プログラム）= “Comprehensive Violence Prevention and Protection Programme.” の Violence を心理的抑圧を意味する Repression に差し替えた。

心臓が動いている

2021-2022, video installation, 38 min 22 sec

Link to the video: <https://youtu.be/Qdp0JJoDDBc>



精神科医の友人からある統合失調症の方の死についての話を聞いていた。話を掘り下げると、統合失調症の可能性のある自身の姉も数年前に川で亡くなっていたという話が出た。医師として統合失調症を考えること、家族として想うこと、そうした二つの顔が交互に垣間見えた。私は彼に、姉についての手紙とカルテを書いてみないかと提案することにした。

この作品は、彼の姉が亡くなる直前に語った”心臓が動いている”という言葉の起点に、二人で対話を重ねながら制作を行なった。精神疾患、そして死に関する語りは、多くの場合に悲劇や悲しみの側面が強調されるように思う。彼は「単純な悲しみには同意できない」と言う。確かに私たちは多くの出来事を日々、単純に理解してしまっているのかもしれない。彼は答えが出ない問いに対して考え続ける。

彼は手紙の中でこう語っていた。
「悲しい出来事があったら泣かないといけないとか、嬉しい出来事があったら喜ぶ顔をしなければいけないとか、そういうことをしなくてもいいって、ようやく分かりました。」

Snap out of it

2020 - 2023, video installation, 16 min 37 sec

Link to the video: <https://youtu.be/90Ulvh8i6nl>



戦前の水治療法（灌水籠）について書かれた文献に、「精神疾患は頭が沸騰しているのが原因だから水で頭を冷やせばいい」といった記述を見て、その言葉が強く印象に残った。私はその言葉を起点に、ある精神疾患を抱えた友人と”まともについて”を話し合う。

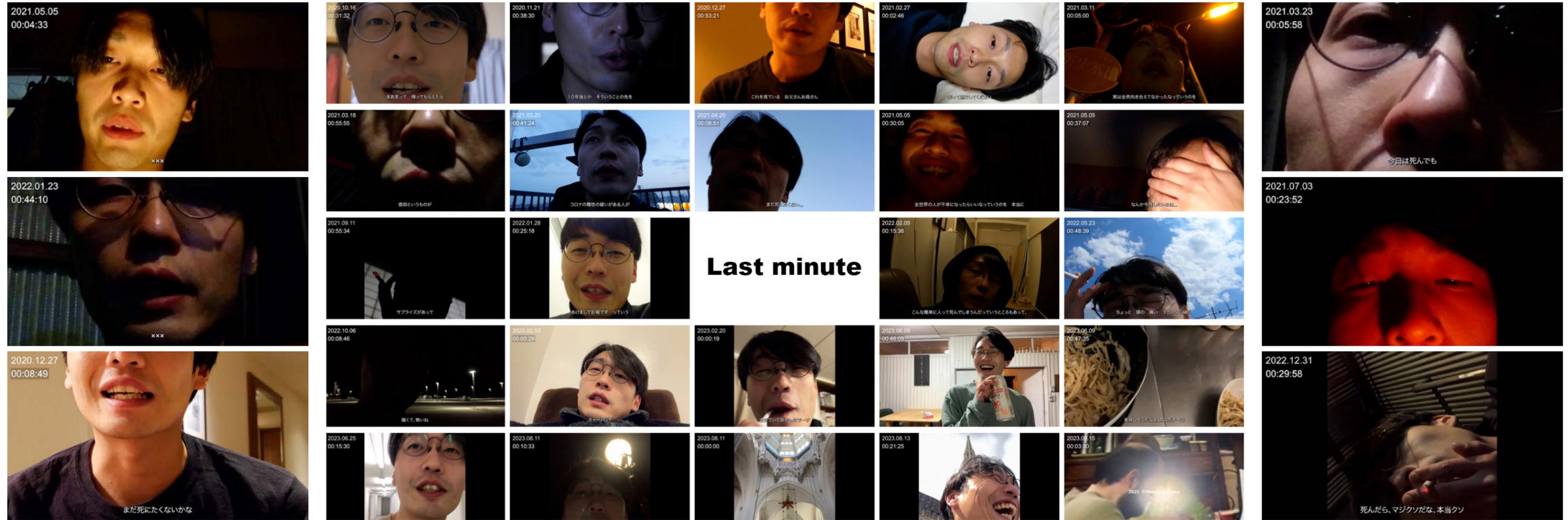
精神疾患における水治療法は、現代では近代的な理論と設備をもって有効だと認められている治療法とされる。しかし、古い時代にさかのぼると様々な国や地域で”水で頭を冷やせばいい”といった、原始的にも感じる想像力のもと行われていた記録を目にすることがある。このような古い”水治療法”のイメージは、”水責め”の拷問のように自白や思考を矯正されていく様子とも重なる。

正気か狂気か、それを証明しようと試みる不条理な対話劇の中で、「あなたはまともですか?」、「私はまともです」と叫び続ける。（本作は、現在行われている”水治療法”とは大きく異なる。）

最期の1分

2020 - , video installation, 1 min (The 1 minute recorded video will continue until I die.)

Link to the video: <https://youtu.be/pbbhoOsGgOA>



この作品は、その瞬間の記憶や感情を残したいと感じた時に、1分の制限時間の中で、私がある時点で残したいと考える”最期の言葉”（遺言）を不定期に記録し続ける映像作品。ライフワークとして死ぬまで記録を続け、私の葬式でこのビデオを流したいと考えている。

また、映像の中で意図的に音声削除の編集箇所があるが、それは私の存命中には公開することができない内容の為。

1分という時間は最期のメッセージとしてはあまりに短く味気ない。人間の終わりは、全ての大切なことを残したくても残せない。何か1つだけ大切な事が残せたとしても、他の大切な何かは抜け落ちてしまう。私は最期の言葉というジレンマに対して、少しだけ抗ってみたいと思う。

私の理想は、年老いてこのビデオをとっている老人の私に対して周囲の人々が、『あの人がまだ生きていたんだ』と皮肉を言われるくらいまで、記録を取り続けることだ。

Imagination of Killing

2023, single channel video, 10 min 26 sec

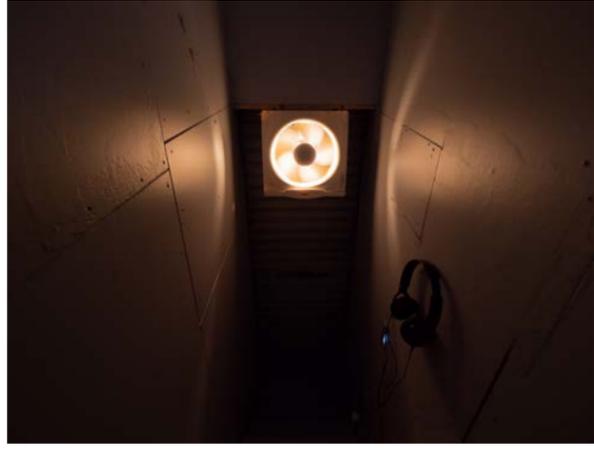
Link to the video: <https://youtu.be/UoLOiw9IHsc>



規範と倫理を遵守する “彼” (AI program) に、殺しの相談を行う。

もっと光を？

2021, sound installation, 25 min 55 sec



「薬を飲んでいる時は本当の私ではない」と話す、ある統合失調症の方の両極の日常についての語り。光を眼前に受けながら、ヘッドホンで声を聞くサウンドインスタレーション。

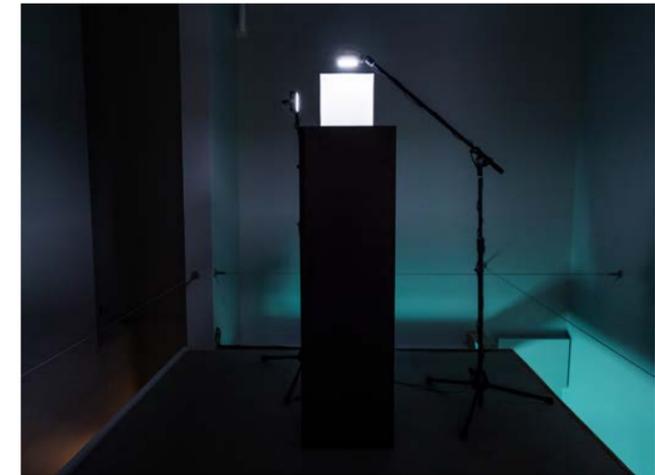
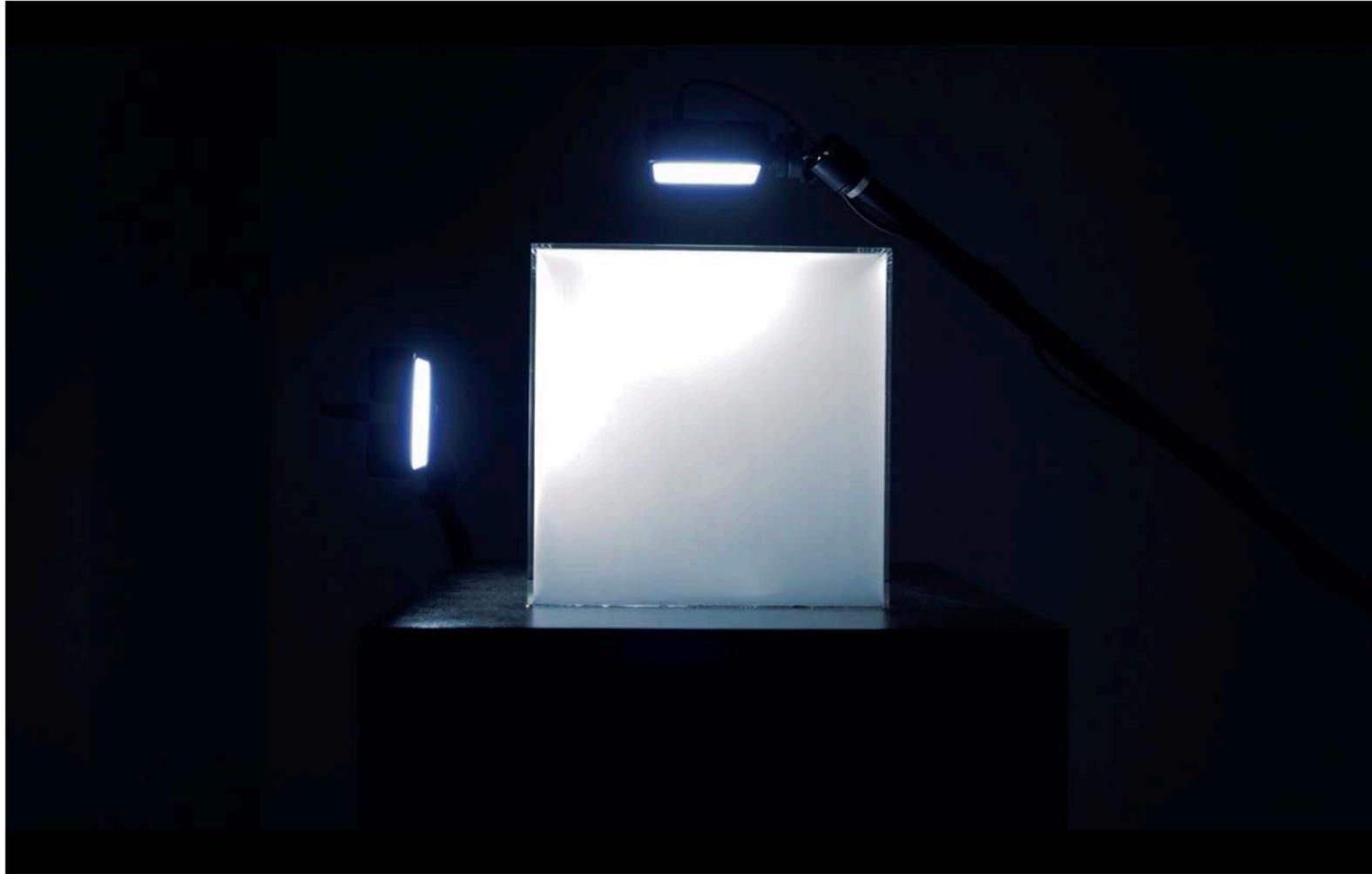
彼女は外側から与えられる社会的役割をこなすことで常人に収まりながら、内側に沸き起こるエネルギーの表出先を探し求め、自由や解放を渴望しながらも、それを行動に移した瞬間に問題になってしまう。パートナーや担当医の目を十分に理解しているからこそ、自分らしさを抑えて病人としてわきまえてしまう、そのジレンマが語りの端々に滲む。

Cloudy Heart

2021, sound installation, loop sound.

(Acrylic box, urethane, PVC pipe, wood, woofer, amplifier, iPod, fog machine)

D350×W350×H1400mm



アクリルボックスの中には密閉された煙が漂い、心臓の鼓動の音圧によって曇りの中で見えない心臓が動いている。

ある精神科医は”曇らせる”という言葉の時を使うと聞いた。それは薬を使って、統合失調症患者が見て感じるつらすぎる現実世界を適度に曇らせることを表現している。それとは対照的に”晴れた”状態は、薬を使わずに、剥き出しの現実世界に晒されている状態を指すのだという。”曇らせる”とは、この合理的社会に順応する状態を指すのだと私は解釈しているが、多くの人々は”晴れて”はおらず、私も含め、自らをある程度”曇らせる”ことで生きているように感じる。

Fire Dialogue (#1 - #16)

2021, lambda print、203×254mm (Variable size)



この作品制作の動機は、見ることができず漠然とした死の恐怖がウイルスという形で世界中に蔓延する中、死生観について考え始めた事が動機としてある。

私は煙草を口に咥え、あなたの火のついた煙草の火を分けてもらう。

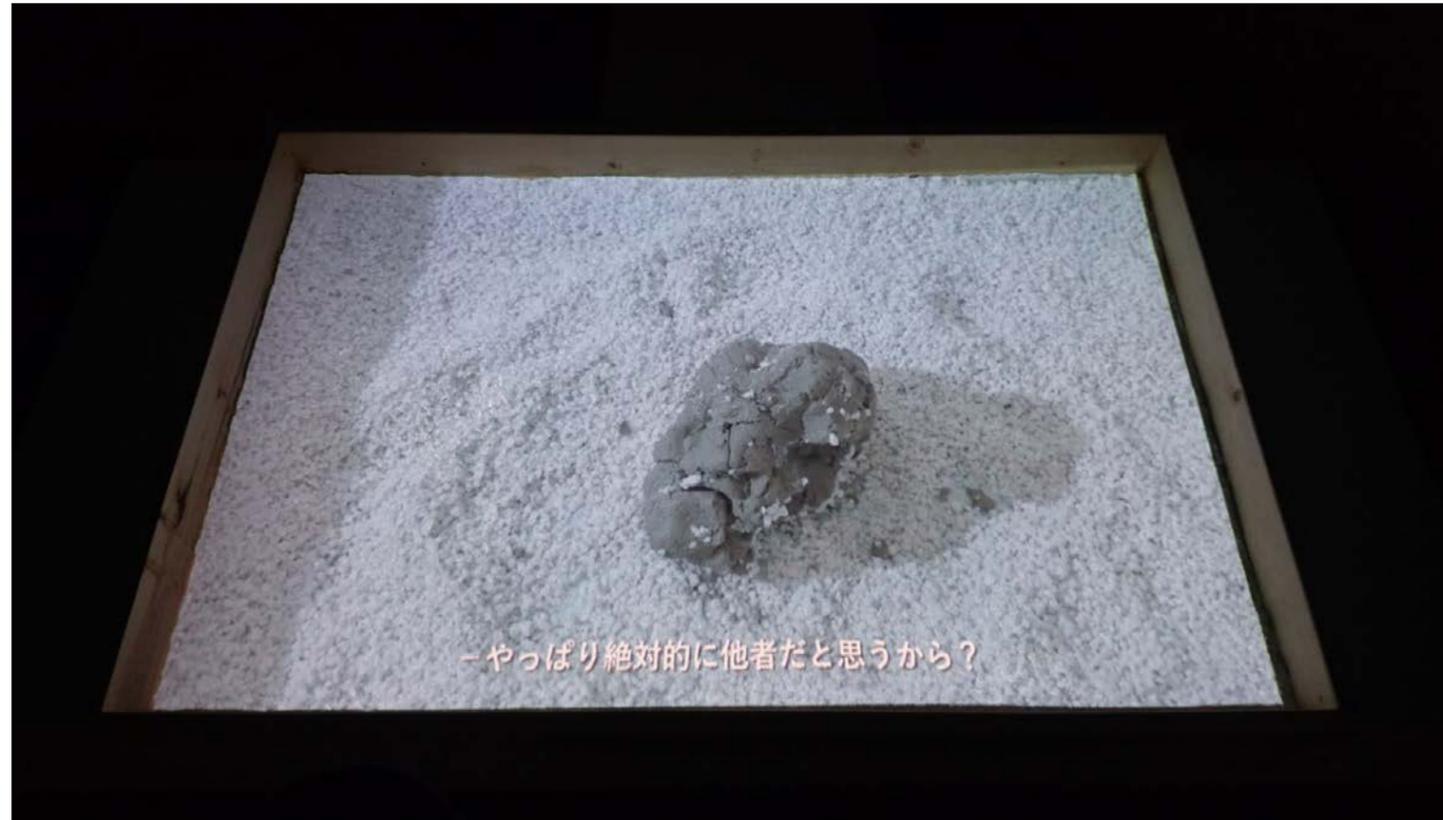
煙草は息を吸いこむ際に火がつく為、お互いの息を吸う動作が合わないと火はなかなかつきづらい。呼吸というと、ふつう生活ではなかなか意識されないが、意識的に呼吸を気にする瞬間というのは、スポーツや仕事などで集中するような局面や、体の不調によって自身の呼吸を意識することがあるかもしれない。しかし、他者の呼吸を意識する機会はあまりないようなも思う。

この煙草の火を共有する行為には、まず密接な距離によって起こるあなたとの関係を意識することになる。あなたがライターを使って煙草に火をつけるのを待つ間、マスクを外したあなたの久しぶりの顔を観察することができる。そして煙草同士をすり合わせ、お互いの呼吸を意識する。

呼吸が交わり煙草に火がつくその瞬間には、私たちのちっぽけな生を確かめられる気がしていた。

社会は夢の共同体

2019, video installation, 16 min 26 sec



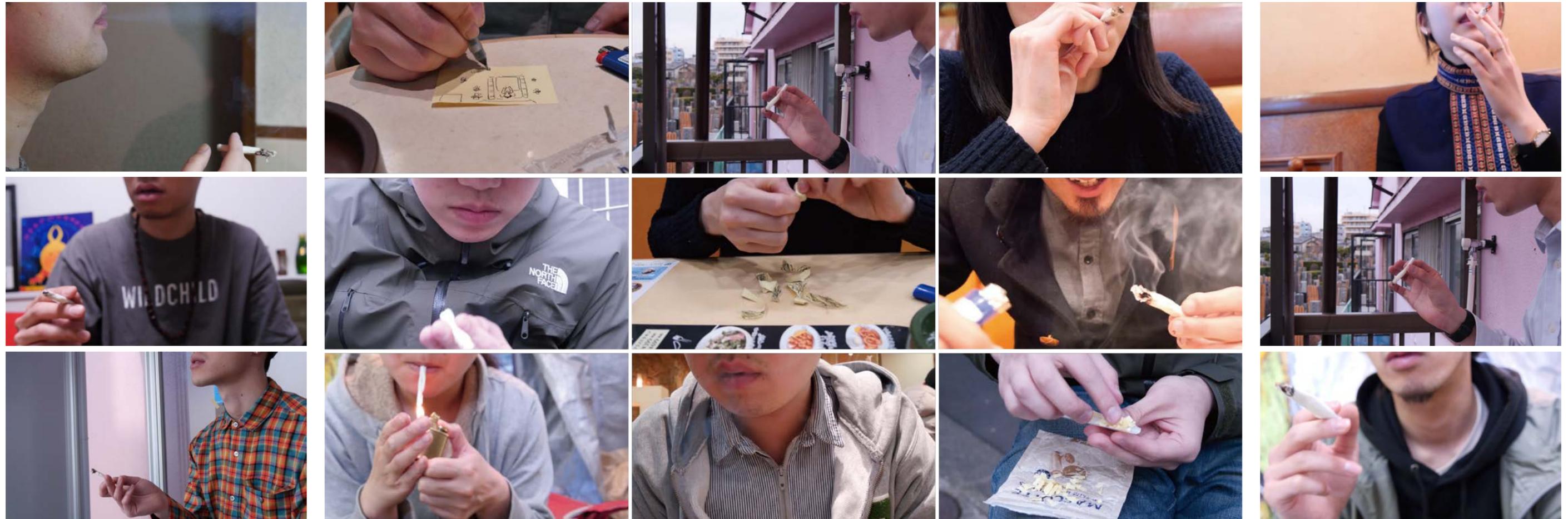
この作品は、ある精神疾患を抱えた友人に、見えないものについて経験したことを語ってもらう。

彼は「コンビニのスピーカーから幻聴を聞いた」という話をポツポツと話し出す。そして、話の内容から浮かび上がるイメージを、その都度粘土に手で形を与えながら、私と彼の対話が行われる。

空間にあるスピーカーからは二人の声が空間に響き渡る。しかし、彼の希望により、彼の姿は映し出されず、彼の肉声はノイズのような電子音に上書きされた音声となっている。結果的に、私自身の言葉だけが空間に響き、鑑賞者は彼の声を読み取るために、箱庭に映し出された映像の字幕を覗き込むことになる。そのインスタレーションの様子は、対話ではなく私の独り言の様に映る。見えない彼と私との対話は、私自身が幻聴を聞いているかのようなようだった。

忘れようとしても思い出せない

2018, video installation



漫画家である赤塚不二夫の代表作「天才バカボン」のバカボンのパパのセリフに「忘れようとしても思い出せない」という矛盾した言葉がある。

この映像作品では、その言葉を様々な人へ投げかけ、「忘れようとしても思い出せない」ことにまつわる話をしてもらう。その話をする際に、話に関連するイメージを紙に描きながら話を行い、話し終わった後に描いた紙は細かく破き、破かれた紙は巻き煙草のように包んで巻いて煙草のように形作る。そして最後に、「忘れようとしても思い出せない」煙草を吸ってもらう。

「忘れようとしても思い出せない」という言葉は、矛盾に満ちた言葉のようでいてどこか本質的に感じる。非日常的な災害や戦争を経験した者は、その矛盾に満ちた言葉から想起してしまうトラウマもあるのではないかと想像する。ただ、日常の中での経験にも、本人にとってはいまだに記憶や感情の整理がつかない出来事がある。

私自身、巻き煙草を巻くことがあり、その煙草を巻く時間は内省的な時間とを感じるが、吸い終わったその重さのある内省は、煙のように軽くなり、次第に消えてしまうように感じたことが制作の動機であった。